23.4.30　北陸中日
（第3種郵便物認可）

広島で被爆し、家族を亡くした少年の人生を描いた漫画「はだしのゲン」。ロシア語に翻訳した金沢市の浅妻南海江（なみえ）さん（80）は、ウクライナで多くの血が流れる状況に心を痛めている。作品の連載開始から半世紀を迎え、先進７カ国首脳会議（Ｇ７広島サミット）開幕を５月19日に控える中、浅妻さんは「人類が再び核の被害に遭わないよう、『ゲン』を通じた平和の種まきが各国で芽吹けば」と願う。（高田みのり）

はだしのゲン 願い届け

金沢のロシア語翻訳者 Ｇ７広島へ訴え

「泣きながらタイプをした。こんな事実があるなんて、知らなかった」。金沢でロシア語訳を手がけていた一九九四年。広島や長崎での親子の被爆体験を基にした朗読劇が持ち込まれると、ロシア人の同僚からこう打ち明けられた。

「世界に原爆の実態が知られていない」。浅妻さんが伝える方法を考えていた折、かつて娘たちに買い与えた「はだしのゲン」を思い出した。協力を快諾した、ロシア出身の同僚女性とともに翻訳を始めた。

一巻分の翻訳を完成させたころ、原作者の中沢啓治さん（故人）から紹介されたモスクワの学生グループと合流。三巻まで出版しながら九八年にはロシアの財政危機で同グループが解散した。四巻以降の出版計画が危ぶまれたが、「ここでやめては被爆者に申し訳ない。翻訳を完成させる社会的使命がある」と一人で作業を続けた。時には一日十数時間を費やし、二〇〇一年に全十巻を完成させた。

同作で外国語に全巻翻訳されたのはロシア語が初めて。ロシアとの友好団体を通じ、現地の学校などに贈られた。科学者を名乗る読者から「私は感傷的な人間ではないが、原爆の悲惨さに衝撃を受けた」と感想が寄せられたことも。一四年にはロシア・ブリャンスク州の出版社から出た初版千部が完売し、二一年刊行の第二版も五百部を売り上げている。

ロシア語に翻訳された「はだしのゲン」を前に、平和への思いを語る浅妻南海江さん＝金沢市で

「各国首脳 手に取って」

昨年に始まったロシアとウクライナの軍事衝突には「八十年前とは比較にならないほど、核戦争の危機が高まっている」と危機感を抱く。ロシアが核の使用をちらつかせ、原発近くでの戦闘が続く中、浅妻さんは「ゲンは人の心に訴える歴史と平和の教科書。私たちにできるのはこれを広めること」という。

「みんなで戦争のない世をつくろう」という中沢さんの願いが込められている作品。広島平和記念資料館に英語版が置かれ、被爆地で初めて開かれるサミットはあらためて世界に発信する絶好の機会と感じる。「訪れた各国の首脳たちが手に取り、ゲンのことを知ってほしい」と期待している。

はだしのゲン　広島市出身の漫画家、故中沢啓治さんが自身の体験を基にした漫画作品。１９７３年から少年誌で連載され、主人公・ゲンが父と姉、弟を失い、自身も被爆しながらもたくましく生きる姿を描いた。これまで20カ国語以上に訳され、国内外で広く親しまれている。本年度の広島市の小学生向けの平和教材からは削除された。

浅妻さんは、同作の読書運動を推進するＮＰＯ法人「はだしのゲンをひろめる会」の理事長、海外普及を目指す翻訳・出版ボランティアグループ「プロジェクト・ゲン」で代表を務めた。